

ドイツ帝国海軍士官ハンス・パーシェのアフリカ体験

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2012-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 立 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13422

ドイツ帝国海軍士官 ハンス・パーシェのアフリカ体験

三宅 立

これは、ドイツ領東アフリカでの体験を通して、「人間」としてのアイデンティティを重んじ「体制」への同化に抗する道へと進んでいった、ドイツ帝国一海軍士官の物語である。

I

ハンス・パーシェ Hans Paasche は、1881年4月3日、バルト海に面したハンザ都市ロストクの聖ゲオルク通りで呱呱の声をあげた。父は、ロストク大学教授のヘルマン・パーシェ（1851～1925）。母エリーゼは、マクデブルクのファーバー家の出であった。父ヘルマンは、初め農業を営んだのちハレ大学に学び、論文「不動産の価格と利子の発展について」で教授資格を得、国家学の教授となった。1884年、ロストク大学からマールブルク大学に転じ、97年にはベルリン近郊のシャルロテンブルク工科大学に迎えられている。そのかたわら、ハンスの生まれた年に帝国議会議員となり（1881～84年）、のち93年に再び当選、1912年には帝国議会副議長となって、第一次世界大戦の勃発、さらには敗戦を迎えている。経済界の党、国民自由党に所属し、自身、キールの造船所ホーヴァルト製作所、ロージッツ精糖、ドイツ石油工業株式会社、ラインメタル、ドイツ国民銀行、鉱工業銀行等々、数多くの会社の監査役をつとめることとなる。妻の持参金を元手に土地投機にも手を出したが、これは必ずしも成功をおさめなかった。他方、妻の父、つまりハンスの母方の祖父は、交通企業と土地取引で

大いに産をなした人物であった¹⁾。

マールブルク時代の家は、庭と厩舎、さらには、馬場付きの大邸宅で、ハンスは、父にすすめられて、山歩きや乗馬、体操にいそしみ、自然への愛を育んだ。1歳年上の姉リージとともに女性の家庭教師（時にはフランス人女性のこともあった）がつけられた。母は音楽好きで、ハンスはヴァイオリンの教育を受けた。彼の才能を母が愛でたことから、姉リージはハンスと疎遠になり、ついには両親の家を去っている²⁾。

ハンスが12歳の時、父が再び帝国議會議員となったのを機会に、一家はベルリンに移り、ハンスはヨアヒムスタール・ギムナジウムに通うことになった。休暇の時は、父がポーゼン州ホーホツァイト（現ポーランド領）の近傍に購入した、のち1908年にはヴァルトフリーデンと呼ばれることとなる森に囲まれた農場で過ごした。父と同じように教授となることが両親の願いだったが、1899年、9年制のギムナジウムの8年生の時、ハンスは健康上の理由からギムナジウムを去って、^{ゼーカデット}海軍生徒となった³⁾。

時は、まさに、ドイツが艦隊建設に踏み出した時であった。前年には第一次艦隊法が成立、続いてドイツ艦隊協会が設立され、さらに1900年には第二次艦隊法が成立を見るのである⁴⁾。それは、また、ドイツ海軍将校団が飛躍的に拡大されることをも意味していた。

ハンスの熱意と才能は、上官——彼、エーギディは、「人間社会刷新運動」をおこしたモーリッツ・フォン・エーギディ（1847～98）元陸軍中佐の息子であった——の高く評価するところとなった。士官候補生を経て海軍少尉に任官されたのは、1902年のことであった。次いで、1903年秋には、体育・フェンシング教師育成のための5ヶ月間の講習を受けにベルリンに出ている。この時彼は両親の家から講習所に通ったが、父はこの年、帝国議会第二副議長になっている。元々酒を飲まず、タバコもすわなかったハンスは、この、士官候補生から海軍少尉にかけての時期、書物や音楽、演劇に親しみ、素人劇にも喜んで参加している。キールではある大学

教授の家で、また、もう一つの軍港都市ヴィルヘルムスハーフェンでは一提督の家で、子供同様に遇されたという。海軍軍医補オットー・ブヒンガーや海軍士官カール・ヒンケルダインと出会い、その後長く親交を結ぶこととなるのも、この頃のことであった⁵⁾。

II

若き海軍少尉ハンス・パーシェが、1904年、ドイツ領東アフリカでの海岸哨戒業務を命じられたことは、彼の生涯にとって重大な転機となった。汽船「マイン」号に乗ってドイツを離れたのは、同年5月初めのことだったが、彼はすでに新しい任務に備えて、東アフリカの人々や動植物に関する文献を読破し、またスワヒリ語を学んでいた。船はポートサイドを経てスエズに到着。彼はここで一旦下船してカイロやギザのピラミッドを訪れている。スエズで再び「マイン」号上の人となった彼は、コロンボで東アジアから来る軽巡洋艦「ブサルト」(1868トン、乗組員160名余)を待ち、ここで同艦の航海長となった⁶⁾。

1890年にダンツィヒ(現ポーランドのグダンスク)の帝国造船所で建造されたこの巡洋艦は、遠洋に常駐するためのもので、ドイツ領南洋諸島の反乱鎮圧が、いわばその初仕事であった。1899年、帰国の途次、モロッコで現地当局者に対してドイツ商人の保護にあたっている。ダンツィヒで修理・改造ののち、1900年、東アフリカ駐留を命じられたが、義和団事件鎮圧のため急遽中国に派遣された。その後も、アモイ、スワトウから長江下流一帯を任務地域として中国にとどまったが、1904年4月、すなわち、日露戦争勃発の2ヶ月後、青島を発って東アフリカへ向かったのであった。コロンボでパーシェをのせた「ブサルト」のダルエスサラーム到着は、同年6月30日のことであった⁷⁾。

ドイツ領東アフリカ(現タンザニアの大陸部タンガニーカ)の歴史は、1884年、コンキスタドール気質のカール・ペーターズ Carl Peters (1856～

1918)らが現地首長たちとの「条約」によって土地を取得したことにさかのぼる。これに基づいて形成されたドイツ東アフリカ協会は、ザンジバル島のスルタンと対立したが、ドイツ帝国は、1885年、巡洋艦戦隊を派遣してこの地を保護領とした。その後、海岸地帯の管轄権をめぐる、1888年、アラブ奴隷商人とアフリカ人首長たちを中心に「アブシリ蜂起」(ドイツでは一般に「アラブ人の反乱」と呼ばれている)が勃発すると、再び巡洋艦戦隊が投入され、長期にわたった戦いののち、90年、ドイツ帝国直轄の植民地としてドイツ領東アフリカが成立するのである。ちなみに、この作戦では、のち、第一次世界大戦最大の海戦たるユートランド沖海戦でドイツ大海艦隊を率いて勇名をはせたシェーア Reinhard Scheer (1863～1928)提督が、巡洋コロヴェット艦「ゾフィー」(2424トン、乗組員260名前後)に乗り組む若き海軍中尉として、巡洋艦戦隊による艦砲射撃に続いた沿岸集落焼打ち作戦の一隊を指揮している⁸⁾。

ドイツ領東アフリカでは、その後、サイザル麻や綿花の栽培、鉄道や道路の建設が、住民に重い負担を課しつつ強行された。ドイツ人の入植も行なわれ、たとえば、バイエルンの農場所有者の息子で1918年11月、バイエルン革命勃発の立役者の一人となったルートヴィヒ・ガンドルファー Ludwig Gandorfer (1880～1918)がダルエスサラームの近傍に農場を構えライオン狩に精を出したのは、まさに1904年前後のことであった⁹⁾。

射撃に長じたパーシェも、当地で、しばしば上陸しては、ライオン、カモシカ、ワニ、イボイノシシ、ホロホロ鳥などの狩猟を行なった。また、子供の時から親しんでいた蝶や甲虫の採集・標本作りにも励んでいる¹⁰⁾。

1905年初め、東アジアでの任務を終えて帰国の途次ダルエスサラームに立ち寄った重巡洋艦「ヘルタ」(6491トン、乗組員470名余——義和団事件鎮圧にも参加)には、友人ブヒンガーが今は軍医となって乗り組んでいた。ある夕べ、「平和の港」ダルエスサラームで彼と落ち合ったパーシェは、ふたりで眺めていたアフリカ人の輪舞「ソゴマ」の輪に自ら加わり、

的確な踊りでこれにすっかり溶け込んで、ブヒンガーを驚かせている。彼によれば、パーシェは、「ヘルタ」と「ブザルト」両艦でスワヒリ語を話せる唯一の海軍士官であっただけではなく、現地の人々と同様、ココ椰子の木に足をまきつけることなく、手を使うだけでのぼることができた¹¹⁾。

III

パーシェの「平和」の時は、しかし、1905年7月、「マジマジ反乱」勃発とともに終わりを告げる。

反乱の原因としては、重税、道路建設などのための労働の強制、そしてとりわけ綿花の栽培の強要等々が指摘されているが、ある種の「ンゴマ」の禁止、狩猟・漁撈や祭の制限といった日常生活への介入も、人々の不満を高めるものとなっていた。反乱の矛先は、ドイツだけでなく、そのもとで支配機構の末端を担っていた「アキダ」の地位にあったアラブ人や、綿花取引でドイツ人とアフリカ人との間に立ったインド人にも向けられた。(ドイツ領東アフリカ総督府は、約20名のドイツ人郡長のもとで現地の支配に当たった、「アキダ」ないしアフリカ人の「スルタン」——その多くは伝統的な地域の支配者だった——を通して、間接的な支配を行っていた。) アキダやスルタンの下で最末端の地区を治めていたアフリカ人の「ジュンベ」は、各地の民族集団の長と同様、むしろ多く反乱の組織者となったといわれる。しかし、反乱が現実^{マジ}に勃発し、しかも、それが地区や民族集団の枠を越えて、ほぼタンザニア東南部一帯にわたる広大なひろがりをもつに至ったのは、聖地の「水」への人々の信仰とその中心となった宗教者——ドイツ側報告書のいわゆる「^{ツアラベラー}魔術師」——の存在によるところが大きかった。至るところに「黒旗」がひるがえり、「マジという戦いの雄叫び」が響いたと、ある軍関係の報告書は記している¹²⁾。ドイツ領南西アフリカ(現ナミビア)では、すでに前年、1904年1月にアフリカ人の反乱が勃発し、その火はなお燃えさかっていた。

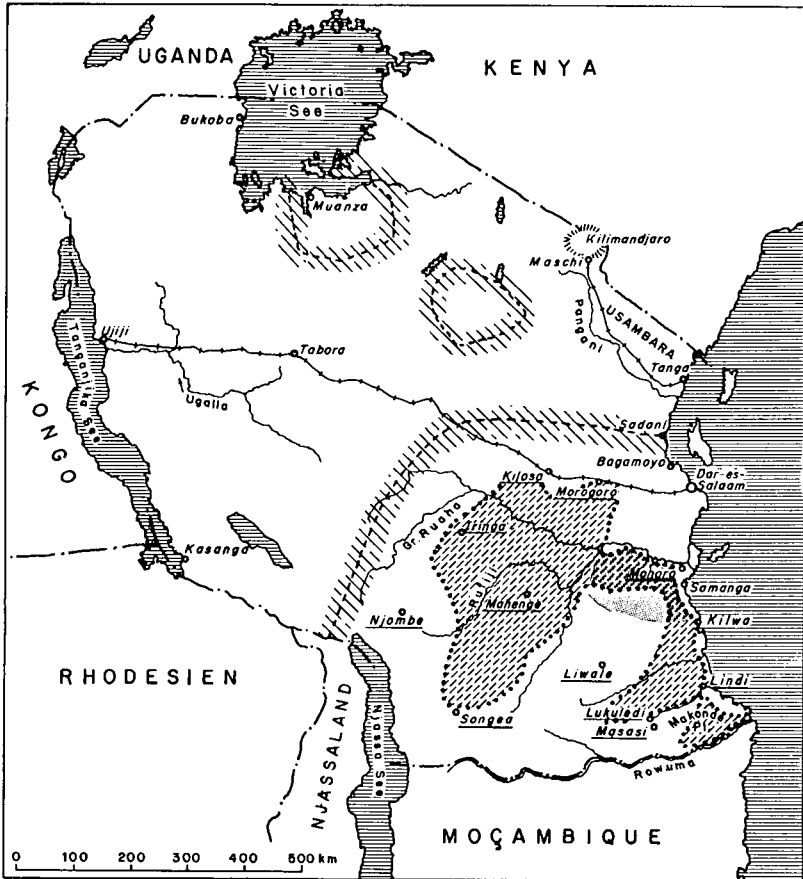
反乱勃発の報が、ドイツ領東アフリカ総督フォン・ゲッツェン Adolf von Götzen (1866～1910) から、巡洋艦「ブサルト」の艦長バック海軍少佐にもたらされたのは、1905年8月1日付の「私信」を通してであった。同艦は、反乱の拡大を阻止すべく、8月3日、守備隊第5中隊——中隊長メルカー Moritz Merker 陸軍大尉の率いる一隊はすでに反乱地域で鎮圧作戦に従事していた——の残りの部分をのせてダルエスサラームを発ち、南方の現地へと向かった。さらに同艦自体、乗組員から成る分遣隊を組織して、港町のキルワ=キヴィンジやサマンガの守備に当たらせるとともに、ルフィジ川の主港モホロに向かわせている¹³⁾。

パーシェも、守備隊の中尉となり、水兵11名と「アスカリ」(アフリカ人の傭兵)30名から成る一隊を率いてモホロを発っており、まさに反乱鎮圧渦中の人となった。そして、すでに8月4日の戦時日誌に、軍法会議を開けるよう戦争状態を宣言した旨を記している。その意図するところは、迅速で厳しい措置、すなわちアフリカ人指導者すべての即時処刑によって「住民によい印象を」与えることであったという。モホロの現地人の通報でドイツ側にとらえられたマジマジ運動の精神的指導者、ンガランビのキンジキティレ・ングワレ Kinjikitile Ngwale が、モホロで絞首刑に処せられたのは、まさに同日ないしその翌日、8月5日のことであった¹⁴⁾。

のちに、パーシェは、マジマジ反乱に際して軍法会議に連なり絞首刑に立ち会った時のことを回想して、次のように記している。

私は、ある日、2、3名のいわゆる首謀者に判決を下すべく、他の何人かと共に軍法会議を構成するよう求められた。この不幸な者たちは、蜂起の張本人とされていた。彼らはその責任を否認した。しかし、彼らは鎖につながれ、実弾を装填した銃をもつアスカリたちは彼らを引き立てながら、彼らに荒っぽく声をかけていた。我々は、蜂起者たちに襲われる危険にさらされていた。こうして、彼らが犯罪者であり、責めを負う者であることは、確かなことだった。[……] それへ

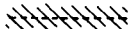
ドイツ領東アフリカ 1905～1907年



反乱の中心地域 (1905年8月初め)

(例) *Lindi*

反乱の拡大 (1905年9月末まで)



反乱の最大範囲 (1905年12月1日まで)



反乱のひろがり (1906年3月1日段階)

〔出典〕 Detlef Bald, *Afrikanischer Kampf gegen koloniale Herrschaft*, MGM,

1/76, S. 34.

の報いは、反乱、大逆罪、戦争での裏切りといったかどでの死刑しかありえない。私は、軍人であり士官なのだ。私は、たるんでいてはならない。ここで見せしめをしなくてはならない。憎しみと復讐心をかきたてなければならない。哀れな男たちは、スワヒリ語でその無実を誓った。軍法会議の議長はスワヒリ語をよく理解できず、私も、一人の人間にその内奥の考えをたずねることができるまでにはまだ至ってなかった。裁判の記録は署名され、有罪とされた者たちは、集まっていた民衆の面前で敵愾に絞首刑に処せられた。私は齒をくいしばった。私は何といても士官なのだ。しかし、ここで起きたことは、あまりにもぞっとすることだった。ここで私は死刑の反対者となった。人は裁判官にはなりえないことをはっきりと悟ったが故に。我々は裁判官なのに何も知らなかったのだから。そして民衆は、広場に立ち、我々をきわめて良心的で、不可謬で、賢いとみなしていた。「犯罪者」たちが夕日の中でマンゴーの木にぶらさがっていた時、私は、処刑の際はどこでもこうでしかなかったこと、よそではせいぜい、ここよりも卑怯にふるまったことを確信した。死刑判決を宣告した者は、大抵は執行に立ち会う勇気すら持ち合わせていないのだから。[……]¹⁵⁾

この回想は、あるいは、先のキンジキティレの処刑にかかわるものだったのであろうか。

パーシェは、また、同じ回想の中で、待伏せに会い射たれて死者が出た時、今日の捕虜は射殺するぞ、弱さは我が身と国全体を危うくするという声でみな一致したことを記している。それに続けて彼はさらにこう述べている。

正当防衛と殺人との間に境はない——これが戦争中の我々弱い人間心のありようなのだ。煽動、殺害への欲望、無慈悲さ、いらだちが支配する¹⁶⁾。

パーシェが、8月7日におけるモホロ付近での勝利のあと、モホロ防衛

の命令を越えて、反乱側の引き続く攻勢に対する反撃に自らうって出、銃や弓矢で武装した数百名に及ぶ反乱軍とルフィジ川上流のキポ付近で遭遇しこれに圧倒的な勝利をおさめたのは、1905年8月21日のことであった。血にまみれた屍体が散乱し、はげ鷹が砂洲の上で輪を描いている中で、仲間の一人が「これでおれ達は白と黒の綬〔=勲章〕をもらえるぞ」と叫んだのは、おそらくこの時のことであろう。パーシェはといえば、翌22日、「蜂起者は四散し、平和を望んでいる」旨を報告し、彼らとの交渉について指示を求めている。しかし、そうした指示のかわりに彼が得たのは、王冠と剣の飾りのついた勲章であった¹⁷⁾。

この頃、東アフリカを訪れた父ヘルマン・パーシェは、モホロからルフィジ郡役所気付でハンスに、9月18日、次のような手紙を送っている。

今や私自身が、お前の無敵の指導のもとで祖国の防衛に参加すべく、外征中なのです。しかし、私は何よりもお前を見、聞き、感じたいのだ。というのは、私は、私達の愛する、唯一、最良の若者であるお前に何か起こるのではないかと思うと、全く神経質ほど心配で気がかりになるからです。〔……〕植民地全体で、私にこう保証しない人は本当に誰もいないということは、何ともすばらしいことです——彼のことは心配する必要はない、彼ほど茂みの中の戦争に適している者はほとんどいない等々。

総督——私はその邸宅に厄介になっているのだが——、バック艦長、そしてヨハネス陸軍少佐からお前によろしくとのこと。彼らは、お前の功績について同じ賞讃の念で話しています。〔……〕ティルピッツはいつも私に電報の原文を回してくれました。そのあとで、ヨハネスからほっとさせてくれるニュースがやってきました。そしてお母さんは、お前の功績にうれしさのあまり泣きました。〔……〕¹⁸⁾。

ヘルマン・パーシェのこの旅は、東アフリカ研究の旅行で、ドイツの植民政策と深くかかわって来たハンブルクのヴェルマン海運会社から費用が

出ていたが、彼は、当時、帝国議会の植民地予算担当報告者で、帝国宰相ビューローに励まされつつ、植民地行政の高官の地位をねらっていたのであった。彼は、——この手紙にもその一端がうかがわれるように——、帝国海相ティルピッツとは早くから親しい関係にあった¹⁹⁾。

ハンスは、この父をキポ付近の戦場に案内した時すでに、9月11日、ルフィジでの指揮官に任ぜられていた。当時の彼の原則は、ドイツへの帰国後に彼が著した『朝の光の中で』では、次のように記されている。

我々は、我々を守ろう、流血によってであれ、どうであれ——我々が主人たり続けようとするのなら。ここでは我々は強者の権利、そして、自然の子よりも多くを必要とする文化の人の特権しかもたないわけだが。しかし、流血と復讐戦は、自身の安全が必要とする限りだけとする。

誰が自分のために労働をしてくれる馬を射殺するだろうか。それが打ちかかるからといって。多分、輓革が短かすぎたのでは。それに、鞭が助けとなるはずでは²⁰⁾。

こうしたパーシェにとってきわめて衝撃的だったのは、行軍の途次、トウモロコシ畑に倒れている瀕死の黒人から、自分たちは敵と誤認されて撃たれたのだと告げられたことだった。彼は、「焼けつくような太陽にさらされて植物の間に横たわっている撃たれた人々を、私は決して忘れないだろう」と記している。こうして彼は、やがて、「私は、私が見た死者たちひとりひとりに償いをしなければならぬ」という思いにとらえられることとなるのである²¹⁾。

事実、彼の戦時日誌には、パーシェ伝の著者ヴェルナー・ランゲによれば、数多くの「非軍隊的な考え」が記されているという²²⁾。とりわけ、パーシェにとって信じ難かったのは、士官仲間の次のような言動であった。のちに彼が記しているところによれば、ある時彼は士官仲間からこう言われたという。

分別をもってもらいたい。君は、戦闘をし、剣勲章をもらった。今度は、我々が、まだ歴史が終わってしまわないうちに、戦闘にありつけるかどうかを知りたいのだ。

パーシェは、この回想にこう付け加えている。

勲章につられる軍人は、戦闘を求め、もし、民衆が柔順になって抵抗しなくなると、残念に思うのである。

彼は、同じ回想の中で、こうも述べている。

戦闘が勲章や名誉を私にもたらすというような考えは、私には思いも寄らないことであった。黒人を好意でひきつけるかわりに、黒人を武装抵抗へと強いるなら、私にとっては好都合なことなのだというような考えも。逆に、私は、平和に向かっている時に、敵対的なふるまいを惹き起こすことをおそれた。しかし、他の者が名誉心かられて、衝突を求め衝突をひき起こそうとしているのをはっきりと認めた²³⁾。

このルフィジの日々に、パーシェは、カエサルの『ガリア戦記』をひもといている。ギムナジウムの時代、予備役将校の教師は、カエサルの戦闘に関する記述を、ローマ第10軍団の形成以来この世に何事も——「マタイ伝第5章」（山上の垂訓）も、「悔い改めよ。天の国は近づいた」という忘れ難い言葉も、ショーベンハウアーも、ドストエフスキーも、リンカーンも、何もかもがなかったかのように語ったものだった。しかし、今、「ビヒモス（河馬）がヨブの時代のヨルダン川でのようにほえ、リヴァイアサン（わに）が川から陸に上がって、その跡を、夜、小屋のまわりに刻むルフィジの谷では、ウェルキンゲトリクス〔紀元前52年のガリア反乱の中心人物〕やネルウィイ人〔カエサルに激しく抵抗したベルガエ人の一派〕に新しい光が投げかけられた」のであった²⁴⁾。

パーシェは、さらに内陸部にはいったマヘングの要塞の強化にも赴いている。ちなみに、この要塞は、1905年8月30日、4000名の反乱軍に襲撃されたが、3週間にわたる包囲の後、9月23日、ドイツ側の援軍の手で囲み

を解かれている²⁵⁾。

パーシェはその後、ルフィジ川南岸ムタンザの村を拠点に定めた。部下は、衛生下士官ひとりと30～40名のアスカリだけで、パーシェは彼らに妻を呼び寄せさせている。それは、この地の平和な生活を強調するためであった。彼は、自分が蜂起は終わったと考えているという印象を現地の人々に与えようとしたのである。彼は、森に出かけては逃げ出した人々に村に戻り畑仕事をするよう説得し、また、小屋づくりと畑仕事を監督した。衛生下士官は、病人を治療し、ますます遠くから患者が彼のところにやって来た。パーシェの回想するところによれば――

反徒たちは、依然として、蜂起当初にこうむった痛手の印象のもとにあった。そして、私の力を過大評価していた。それに、黒人たちの間では、私が、降伏した者には誰にでも保護を与えると言ううわさが、すみやかにひろまった²⁶⁾。

この間、ドイツの守備隊は、海兵隊(士官9名、下士兵219名)や東アジア・南洋方面からの軍艦(軽巡洋艦「テーティス」と、「ブサルト」の姉妹艦「ゼーアードラー」)の増援で飛躍的に強化されていた²⁷⁾。入植者の間からは、「慈悲を示すな、交渉はなしだ！」という叫び声が上げられ、次のような論陣が現地の新聞紙上で張られた。

もはや平和の達成ではなく、今第一に肝要なものは――反徒の処罰、それも、ドイツの反乱に対する反逆を再び敢えてする意欲を連中から永遠に奪ってしまうような迅速かつ根本的な処罰なのだ。

こうした声に応えて、守備隊が反乱の徹底的な鎮圧に向けて打ち出したのは、(1)全てを、新たに建設された村をも、破壊すること、(2)家畜と食糧を奪い去ること、(3)住民を絶えず不安にさせることという、徹底的な焼土・抑圧の作戦であった。そして、最も効果的とされたのは、1907年の包括的な報告書によれば、「女子供の連行」であった²⁸⁾。

こうした中で、ある日、パーシェが外回りをしていて、ムタンザ村は

反乱側に攻撃され、焼き払われた。守備隊指令部は、この拠点の放棄を決定し、パーシェに海岸に戻るよう命じた。こうして彼は、1906年2月10日、再び巡洋艦「ブサルト」上の人となるのである²⁹⁾。

反乱は、その後、1906年6月の戦いを最後に終結へと向かい、1908年7月、最後の反乱指導者の射殺をもって幕を閉じることとなる。この反乱で命を落としたアフリカ人はドイツ側当局の数値で7万5000人、実際には25万から30万人にのぼるともいわれる。これに対して、ドイツ側の死者は、白人15人、アスカリ人73人、いわゆる「補助戦士」316人であった³⁰⁾。

「ブサルト」が修理と乗組員の休養のため南アフリカのケープタウンに赴いたのは1906年5月のことで、そこに5月11日から6月18日までとどまっている。ランゲが指摘しているパーシェの南アフリカ行きも、おそらくこの時のことであろう³¹⁾。

この年、パーシェはくり返し重いマラリア病に苦しみ、勤務を続けることが不可能となった。少なくとも同年の8月から9月にかけて、彼はドイツ領東アフリカ北部のマサイ平原で休養の日々を過ごしている。(かつてドイツに対して激しい抵抗闘争をたたかった民族集団マサイの人々は、マジマジ反乱には加わらず、むしろ反乱鎮圧の側に動員されている。)この間に、パーシェは、アフリカ人60名から成るキャラバンを率いて、ライオンや象、河馬などを狩猟し写真撮影する旅を行っている。しかし、彼がさらにアメーバ赤痢にかかった時、病氣療養のために帰国を命じられ、晩秋には故国の土を踏むのである。そして、翌1907年公刊したアフリカ回想記『朝の光の中で』は、至近距離から撮った象の写真など、アフリカの野獣たちの生き生きとした世界をとらえた写真とあいまって、大きな反響を呼ぶこととなる³²⁾。

Ⅳ

ハンス・パーシェは、アフリカから帰国したその年のうちに、未来の

妻、エレン・ヴィティング Ellen Witting (1889～1918) と出会っている。彼女は、元ポーゼン市長で現ドイツ国民銀行頭取の枢密政府顧問官リヒャルト・ヴィティング Richard Witting (1856～1923) の娘であった。ハンスの父と同じく国民自由党に属したエレンの父は、ふたりが結婚する1908年にはプロイセン下院議員となっている（～1913年）。この父の弟マクシミリアン・ハルデン Maximilian Harden (1861～1927) は、1892年に創刊した週刊誌『^{ツェイトUNG}未 来』に拠ってヴィルヘルム時代批判の論陣を張っていた。彼ら兄弟の父アーノルト・ヴィトコフスキは、ベルリンのユダヤ系織物商人であった³³⁾。

結婚式は、1908年12月19日、ベルリンのマタイ教会でとり行われた。これより先、ハンスは、ヴィースバーデンのサナトリウムでの療養生活のうち、海軍での勤務生活に復しており、結婚当時は、キールにあった戦艦「シュレージエン」(14218トン、乗組員780名前後)の航海長であった。この年、彼はキールで「帝国海軍禁酒士官連合」を設立している³⁴⁾。

しかし、パーシェはもはや海軍生活になじまず、アフリカへの思いにとらえられて、ついに1909年春、当時「シュレージエン」が所属していたドイツ大海艦隊第一戦隊の司令官であったホルツェンドルフ海軍中將(のち元師)の慰留にもかかわらず海軍を去り、退役海軍大尉となった。当時の「シュレージエン」艦長コッホ海軍大佐(のち海軍大将)がのちに記した評価によれば――

私は、パーシェ海軍大尉を多面的に教育された有能な人間と認めた。しかし、彼は、遺憾にも士官として不可欠な軍隊的特性を全く欠いていた³⁵⁾。

そもそも、パーシェ自身によれば、彼が危険を冒してアフリカの野獣の狩猟や写真撮影と取り組んだのは、一つには、自分が本当に軍人なのか、勇気があるのかを疑い、自分をためそうとしたからであった。その中で彼が認めたのは、軍人の勇気は大きいものではなく、それは、盲目的な服

従、無考え、想像力の欠如、冷淡さなのだということであった³⁶⁾。

いずれにせよ、パーシェは、海軍を去った1909年、妻と共に、「ナイル川の源への新婚旅行」に出かけている。時にハンスは28歳、そして妻エレンは20歳の若さであった。彼らは、イギリス領東アフリカ（現ケニア）のモンバサからナイロビを経て、ヴィクトリア湖に向かった。彼らがこの間にキリマンジャロ方面に行ったという話がパーシェ家に伝わっているが、これはなお確認されていない。1910年1月には、ヴィクトリア湖に浮かぶウケレウェ島の小屋で暮らしたらしい。パーシェがのちに、「かつて私の小屋が立っていて、二人の人間が幸せだった内海の島」と書いているのは、おそらくこの島であった³⁷⁾。

1910年3月10日、パーシェは、ヴィクトリア湖西岸、ドイツ領東アフリカ西北端のブコバに駐在する、ドイツ弁理公使から、妻と60余名のアフリカ人を伴ってナイル川の源に向かう旅の許可を得ている。その月の内に同じくドイツ領だったルワンダにはいった一行は、キヴ湖に寄ったのち、同年6月、ついに標高2500メートルの白ナイルの源に達した。ここは、3年前の1907年以来ルワンダ弁理公使となっていたリヒアルト・カントが12年前に見出したところであった。一行は、次いで、ルワンダの「スルタン」の宮廷を訪問し、また、その答礼訪問を受けている。パーシェの回想によれば――

私は、王の訪問を大いなるものとして経験したこと、そして、白人みなとの絶対的な優越の意識やその類いの偏見に影響されなかったことを喜んだ。ムジンガは王侯であり、私は西洋の教養の代表者であった。ホメロスとエジプトを介して、私と私の傍らにすわる不思議な人物とは結ばれていた。ホメロスの世界が私の眼前に以前よりも生き生きと現前していた。〔……〕。

彼は、若者たちのくりひろげる競技を見るうちに、オデュッセウスのように、自分の力と技を示す誘惑にまけて自ら競技に参加し、競争では2位

となったが、走り高跳びでは、1.8メートルを跳んだとはいえ、2メートルを越えて跳ぶ若者たちには全く歯が立たなかった³⁸⁾。

1909年のおそらく11月から翌年の8月にわたったこのアフリカ旅行の途次、パーシェが立ち止まって観察し、測量し、記録していると、人々が驚嘆の念で見まもっていた。彼は、それについてこう記している。

彼らは、無邪気にも、こうした文化がよいことに、よりよき未来にのみ役立つに違いないと考えているように思われる。そして私はまさに、これらすべての物で我々が地球をいかに悪く管理し、いかなる涙と流血、いかなる苦痛の責めを我々が負っているかを考え恥じ入るのである³⁹⁾。

彼が1910年1月、ウケレウェ島で記した旅日記にも、「我々は、本当は有害なものをよいものとみなしている」とある。彼がそうしたものとして挙げているのは精米機で、それで取り除かれる穀皮には有益な栄養が含まれており、白米を食べていて病気になる、玄米から取り去られたものが薬として与えられることとなる、と彼は指摘している。そして、機械によって黒人女性の労働が節約されるというが、木臼と突き棒で粳がらを取る彼女たちの労働は、健康によい運動を規則的にすることなのであり、しかも、料理をするその日に粳がらをとるのは、栄養の点でもすぐれている、と記されている。

彼は、さらに、機械によって労働力が自由になると、労働力の取引が始まると続けている。海岸にプランテーションが開かれ、黒人が働きたがらないと、酒、タバコ、色とりどりの服等々への欲求が呼びさまされ、手工業が破壊される。

黒人の生活から、独自のもの、力強いもの、美しいもの、そして平穏が奪われる。彼は、せかせかするようになり、懐中時計が必要になる。彼はますます工業の購買者となる。輸入が増大する。黒人は、お金をより多く享受しようとしてより多くお金をもうけようとし、プラ

ンテーション労働の募集に応じることになる。しかし、新しい鉄道で沿岸に下っていった者が、みな帰って来るわけではない。多くの者は、気候の変化に耐えられず、十分備えもできていず、死んでいった。そして戻って来た者は、墮落し、酒飲み、享楽好きになり、性病にかかっていた。家庭生活は破壊された。子供の数は減り、犯罪人の数が増大する。数知れない人々が鎖につながれた懲罰奉仕で労働する。ひょっとするとヨーロッパ人の暴力に対する最後の絶望的蜂起が民衆の力をもう一度結集させる。すると、死者、英雄、祖国のために死ぬ解放の戦士が出、「蜂起者」と呼ばれ、首を吊られる。燃える小屋、両親を失った子供たち、そしてヨーロッパ人の側では無敵の軍人たちが。ぞっとするような悲惨さである。責めある者は見出されない。彼は、官職と栄誉の内に座し、重んじられ、尊敬され、「母国」（美しい母性概念）で大きな口をたたき、さらには、恩人の望むようにはしようとしぬ現住民に怒りさえする。それとも、もしかすると、本当に責めある者は、強力な諸国民に労働、義務、法といった有害な概念をもたらした学識者なのだろうか。その業績を我々がなお死に至らしめていない著名な、死せる人なのだろうか。

これが、これまで、ヨーロッパの植民政策であった。

火薬と蒸気力をもって罪をもたないでいることは、何と困難なことか！

我々にはそれをいつかはなしうるのだろうか⁴⁰⁾。

V

パーシェは、ドイツへの帰国後間もなく開かれた1910年のドイツ禁酒者大会で一場の演説を行った。その中で彼は、焼けつくような太陽のもと、道なき茨の茂みを、16時間も歩き回っても心地よい疲れを覚えたただけだっことに触れながら、禁酒生活の効用を説いて拍手かっさいを浴びた。そし

て、禁酒する生活改革者の活動の目ざすべき場として植民地を勧めた彼は、講演を次のような言葉で結んだ。

植民地は、文化諸国民カルトゥーフアエルカーの精神が最も明確な敵を刻む畑なのです。

ドイツ国民フオルクが、より低い人種の主人たるにふさしい息子たちをもって
いることを示してほしい。ドイツ人が酔っていなければ何ができるかを世界に示してほしい⁴¹⁾。

パーシェの「これまで」の植民政策に対する批判は、上で見たように、マジマジ反乱鎮圧作戦を含むそのアフリカ体験を踏まえた、きわめて厳しくかつ鋭いものであった。しかし、彼もまた、人種論が盛行する時代の子だったのである。パーシェ伝の著者ランゲは、このことと関連して、「全般的な生活改革」をめざす雑誌『先遣隊』フオーアトルツプをパーシェとともに1912年に創刊したヘルマン・ポーペルト Hermann Popert (1871~1932) が1910年に著した『ヘルムート・ハリンガ』に現れるスラヴ人への差別意識に言及している。しかも、この小説は、その後長年にわたって禁酒運動のバイブルとなったのであった⁴²⁾。

1910年といえ、皇帝ヴィルヘルム2世の名において、「新歩兵体操令」が発せられ、軍隊自体に遊戯・スポーツを導入することが正式に定められた年であった⁴³⁾。パーシェは『先遣隊』創刊号(1912年2月1日付)に「若きドイツ人」という論稿を寄せ、ボーイスカウト生活を推奨したが、そこでは次のように述べられていた。

青年の力と現実感覚が呼び覚まされ、国防ヴェーアクラフト力が高められなければならない以上、あらゆる軍隊的なものは背景に退かなければならない⁴⁴⁾。

ここにも、我々は、パーシェの「生活改革」への意志と時代風潮とのアンビヴァレントな関係を見てとることができよう。のち、ドイツ敗戦後の1919年、彼はパンフレット『失われたアフリカ』の中で、戦前をふり返り、こう記している。

女性は、新兵を産む者としてのみ価値を有していた。しらふと国民の健康は、国防力のために働いた⁴⁵⁾。

しかし、パーシェは、戦争讃美の風潮には同調しえなかった。彼がアメリカでの「戦争で眼にした恐ろしい悲惨さの記憶」が時と共にますます彼にのしかかっていったからであった。こうして彼は、ドイツの平和運動の一員となるのである⁴⁶⁾。

1914年8月、第一次世界大戦が勃発した時、このパーシェもまた、「祖国の事に全力をもって奉仕する」ことを求めて軍に志願し、再び海軍の人となった⁴⁷⁾。しかし、部下の水兵に禁酒を説き、スポーツに共に汗を流し、共に山野を歩き、彼らの精神的向上に努めるパーシェは、上官や士官仲間の多くに疎まれることとなる。しかも、この間、彼は、妻エレンともども、平和運動へと共感を寄せていった。こうして、彼は、1916年1月末には、再び海軍を去ることとなるのである⁴⁸⁾。

パーシェ解任の重要なきっかけとなったのは、第2水雷団長リュバート Ulrich Lübbert 海軍大佐がのちに記すところによれば、「軍法会議で共に裁判にあたることを彼が拒否した」ことであった。そして、別の証言によれば、この軍法会議は一水雷兵を反軍国主義思想と煽動的言動のかどで裁くこととなっており、パーシェは、自分自身がその点で「予断」をもっている旨を明確にして裁判を共にすることを拒否し、その結果、上司との間に昂奮したやりとりが交わされるに至ったのであった⁴⁹⁾。事実、パーシェは、解任後間もなく、自ら市民派の平和運動「新祖国同盟 Bund Neues Vaterland」に参加している。そして、翌1917年10月には、ラディカルな平和主義の呼びかけを内外にひろめたかどで捕らわれの身となるのである⁵⁰⁾。

ドイツ水兵の反乱に始まるドイツ革命の中で、パーシェもまた水兵らの手で解放され、兵士評議会、さらには労兵評議会執行評議会の一員となった。そして1920年3月の反革命的なカップ一揆直後の5月21日、彼はヴェ

ルトフリーデンの農場において、ヴァイマル共和国国防軍の手で「逃走中」射殺されることとなる⁵¹⁾。

これより先、パーシェは、1918年12月8日、最愛の妻エレンを病気で失ったが、彼女の追憶に捧げられたパンフレット『失われたアフリカ』の中で、彼は次のように記している。

人間から人間へは、真直ぐな道が通っている。しかし、その道は、今日まで、暴力と虚偽が支配するために必要とされるあらゆる誤謬によって閉ざされて来た。

ドイツ人よ、次のことをはっきり自覚してほしい。君は、君を隣人の死刑執行人とし、ついには君自身をひどい眼にあわせた^{ジュステーム}体制に対してついに憤りを示さなければ、諸国民の共同体から締め出されたままであることを⁵²⁾。

本稿では、この言葉に至る、そしてこれに続く彼の道程のいわば半ばまでしかたどることができなかった。彼が大戦前夜に書いたドイツ、さらにヨーロッパ文明全体に対する批判の書『アフリカ人ルカンガ・ムカラのドイツ最奥部探検旅行』⁵³⁾の考察を含め、次の機会に待ちたい。

注

- 1) 以上、Werner Lange, *Hans Paasches Forschungsreise ins innerste Deutschland. Eine Biographie*, Bremen 1995, S. 12ff., 112, 230. なお、本稿は、パーシェ関係の史料・文献を幅広く踏まえた本書に多くを負っている。ヘルマン・パーシェについては、さらに、Hans Jäger, *Unternehmer in der deutschen Politik (1890-1918)*, Bonn 1967, S. 38; Dirk Stegmann, *Die Erben Bismarcks. Parteien und Verbände in der Spätphase des Wilhelminischen Deutschlands*, Köln 1970, S. 28.
- 2) Lange, S. 16; Hans Paasche, *Mein Lebenslauf*, in: Hans Paasche, "Ändert Euren Sinn!" *Schriften eines Revolutionärs*, hrsg. v. Helmut Donat/Helga Paasche, Bremen 1992, S. 54. この履歴書(1917年11月26日付)は、第一次大戦下、官憲にとらえられたパーシェが獄中で記したもの。彼の雑誌論文やパンフレットを集めた上記の貴重な資料集に収められている。

- 3) Lange, S. 17ff., 21ff.
- 4) 大野英二『ドイツ金融資本成立史論』有斐閣, 1956年, 223頁以下。
- 5) Lange, S. 24ff.
- 6) *Ibid.*, S. 30ff. なお, 同書 (S. 233) によれば, パーシェが同艦の副長だったとするのは誤り。
- 7) Hans H. Hildebrand/Albert Röhr/Hans-Otto Steinmetz, *Die deutschen Kriegsschiffe. Biographien* (以下, *Kriegsschiffe* と略), Bd. 1, Herford 1979², S. 178ff.
- 8) G. W. F. Hallgarten, *Imperialismus vor 1914. Die soziologischen Grundlagen der Außenpolitik europäischer Großmächte vor dem Ersten Weltkrieg*, Bd. 1, München 1963², S. 210ff., 349ff.; *Kriegsschiffe*, Bd. 4, Herford 1986², S. 70f.; Bd. 5, Herford 1988², S. 127; Reinhard Scheer, *Vom Segelschiff zum U-Boot*, Leipzig 1925, 1936², S. 85ff.; 富永智津子「アフリカ分割——ザンジバル・スルタン領 (Zanzibar Sultanate) の事例——」林晃史編『アフリカの21世紀 第1巻 アフリカの歴史』勁草書房, 1991年, 48~79頁。
- 9) 当時のドイツ領東アフリカについては, 後掲注12)の諸文献を参照。ルートヴィヒ・ガンドルファーについては, 参照, 拙稿「ガンドルファー兄弟事始め——第一次世界大戦前のバイエルンにおける国家と農民——」『駿台史学』45号 (1978), 1~70頁。
- 10) Lange, S. 16, 36.
- 11) *Kriegsschiffe*, Bd. 3, Herford 1985², S. 73ff.; O. Wanderer [Otto Buchinger], *Paasche-Buch*, Hamburg 1921, S. 24ff. (Nachdruck als Anhang in: “Auf der Flucht” erschossen... *Schriften und Beiträge von und über Hans Paasche*, hrsg. v. Helmut Donat unter Mitwirkung von Wilfried Knauer, Bremen/Zeven 1981); Lange, S. 34ff.
- 12) Detlef Bald, Afrikanischer Kampf gegen koloniale Herrschaft. Der Maji-Maji-Aufstand in Ostafrika, *Militärgeschichtliche Mitteilungen*, 19 (1976)-1, S. 23~50; Karl-Martin Seeberg, *Der Maji-Maji-Krieg gegen die deutsche Kolonialherrschaft. Historische Ursprünge nationaler Identität in Tansania*, Berlin 1989; John Iliffe, *Tanganyika under German Rule, 1905-1912*. London 1969; do., *A Modern History of Tanganyika*, Cambridge/New York 1979; 岡倉登志「タンザニアにおけるマジマジ反乱 (1905-1907)——原因・組織とイデオロギー・経過・影響——」『駿台史学』36号 (1975), 52~79頁; 富永智津子「キリスト教伝道と東アフリカ社会——マジマジ闘争との関連から」林晃史編前掲書, 25~47頁。
- 13) Bald, S. 33f.; *Kriegsschiffe*, Bd. 1, S. 180.

- 14) Bald, S. 40, 49; Lange, S. 39; Seeberg, S. 36; Gilbert C. K. Gwassa, Kinjikitile and the Ideology of Maji Maji, in: Terence O. Ranger/Isaria N. Kimambo (eds.), *The Historical Study of African Religion. With Special Reference to East and Central Africa*, Berkeley/Los Angeles 1972, p. 214; Iliffe, *Modern History*, p. 172.
- 15) Hans Paasche, *Meine Mitschuld am Weltkriege*, Berlin 1919, S. 12f. (Nachdruck als Anhang in: "Auf der Flucht" erschossen...). このパンフレットは、Paasche, "Ändert Euren Sinn!", S. 217~232 にも再録されている。該当箇所は、S. 225f.
- 16) Paasche, *Meine Mitschuld*, S. 10.
- 17) Lange, S. 41, 45f., 233; Paasche, *Meine Mitschuld*, S. 10.; Iliffe, *Modern History*, p. 195.
- 18) Lange, S. 48f.
- 19) *Ibid.*, S. 24, 48
- 20) *Ibid.*, S. 40f. (Paasche, *Im Morgenlicht. Kriegs-, Jagd- und Reise-Erlebnisse in Ostafrika*, Berlin 1907, S. 121 からの同書の引用による。)
- 21) Paasche, *Meine Mitschuld*, S. 10; Lange, S. 42.
- 22) Lange, S. 46.
- 23) 以上、Paasche, *Meine Mitschuld*, S. 9, 11; Lange, S. 42, 46. パーシェは、敗戦と革命ののちに書かれたこのパンフレットの中で、さらに次のように論じている。

勲章をもらうために戦争を求める軍人のことを誰も驚いてはならない。というのは、勲章がドイツで革命前にあたっていた通りのものであった限り、実際作用していた通りに作用せざるをえないことは、明らかどころだからだ。そして、黒・白の綬のためになされた残虐行為の責めは、自由と民主主義のために何もしなかった、そして、勲章と称号への畏敬の念と奴隷根性で全世界の嫌悪を買ったドイツ国民全体に帰せられるのである。アフリカで戦った士官たちは、個々に見れば、すばらしい人間だった。立ち居ふるまいが模範的だった多くの士官を私は知っている。しかし、彼らは、偏見の強制のもとにあったのであり、この強制は、国民全体の解放闘争によってのみ除去されえたのである。[……]

私は、軍人が支配するところでは、人間は何ものにもあたいたくないことを経験した。まさに軍人こそは、また名誉欲に富んだ人間として、しばしば、祖国と呼ばれてよい共同の事を認めないのである。一定の国境内に住む一国民の共同の利害といったものが存在するのならば、戦争を個人的名声を顧みることなくすみやかに終結させようとする共同の意志や願いもまた存在しなければならぬ。しかるに、勲章と栄誉の体制は、各人が自分個人の事だけ

を欲し、事柄を重んじないという結果をもたらすのである。(Paasche, *Meine Mitschuld*, S. 11, 14f.)

- 24) *Ibid.*, S. 12; Lange, S. 43f.
- 25) Lange, S. 50; Seeberg, S. 64f.
- 26) Lange, S. 50f.
- 27) *Kriegsschiffe*, Bd. 1, S. 180.
- 28) Bald, S. 40. また、参照、Seeberg, S. 78ff.
- 29) Lange, S. 46, 52.
- 30) Seeberg, S. 83ff., 88. 「ルガルガ」と俗称された「補助戦士」ないし「補助部隊」については、参照、*ibid.*, S. 82; Bald, S. 43f.
- 31) *Kriegsschiffe*, Bd. 1, S. 180; Lange, S. 55.
- 32) Lange, S. 54ff. マサイ人の動向については、参照、Seeberg, S. 66, 76; Bald, S. 44.
- 33) Lange, S. 62ff.
- 34) *Ibid.*, S. 69.
- 35) *Ibid.*, S. 70. なお、上官たちの経歴は、Hans H. Hildebrand/Ernest Henriot, *Deutschlands Admirale 1849-1945*, Bd. 2, Osnabrück 1989, S. 139ff., 267f.
- 36) Paasche, *Meine Mitschuld*, S. 15; Lange, S. 54f.
- 37) Lange, S. 71ff.
- 38) 以上、*ibid.*, S. 86ff. 引用は S. 105.
- 39) Aus dem Tagebuch einer afrikanischen Hochzeitsreise, in: Paasche, "*Ändert Euren Sinn!*", S. 156; Lange, S. 80.
- 40) Aus dem Tagebuch, in: Paasche, "*Ändert Euren Sinn!*", S. 160ff. (この日記が書かれた時期については、*ibid.*, S. 257); Lange, S. 85f. パーシェは、しかし、当時、植民政策論を全面的に展開したわけではなく、また、植民政策のすべての反対者になったのでもなかった。のち、第一次世界大戦下の1916年に彼が日記に記した「未開」に関する覚書には、本文に紹介したようなこれまでの植民政策に対する批判が簡潔に述べられたのち、次のように記されている。

それでは、私はどの点で自分のことをこれらの人々よりもよいと思っているのか。私は、私をもたらすものの価値を疑っており、私が見出すものに対して畏敬の念をもっている。それ故私には、全く異なった目標が浮かんでいるのである。すなわち、私は、人々や国々をよりよくしようなどとは考えず、未開との交渉の中で自分自身がよりよくなることを願う。少なくとも、悪いものをその国にもち込まないこと——この願いを抱く者は、自分の現実、自分のもつものに対して新しい尺度をあてはめることを止めることはない。

未開との関係は、まともな両親が彼らの子供たちに対してとる関係でなければならぬと私は信じる。彼らは、子供たちを、何か欠如しているものとは見ず、美にも残虐にもひとしく形成されようとしている完全な原料を見るのであり、そして、彼らは子供たちを教育しようとするが故に、自分自身を教育するのである。

こうした考えの中に、私の眼に浮かんでいる植民政策の全体系が存するのである。(Paasche, Die Wildnis, in: Paasche, *Ändert Euren Sinn!*, S. 164f.)

- 41) Lange, S. 109f.
- 42) *Ibid.*, S. 110, 122f.
- 43) 望田幸男『軍服を着る市民たち——ドイツ軍国主義の社会史』有斐閣, 1983年, 89頁。
- 44) Lange, S. 124.
- 45) Paasche, *Das verlorene Afrika*, Berlin 1919, S. 8 (Nachdruck als Anhang in: "*Auf der Flucht*" erschossen...) ちなみに、1905年に結成された母性保護連盟には多くの優生学者や民族衛生の信奉者の名が見られるが、彼らが連盟に参加したのは、もっぱら「健全」な人種の増加を目的としてであった。参照、姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房, 1993年, 109頁。本書では、さらに、同連盟が「新しい倫理」を掲げて非嫡出子の地位向上に努め、妊娠中絶の自由化をめざす運動を展開したのに対して、「ブルジョア女性運動穏健派」が、家族制度を擁護して同連盟に敵対し、女性に国民としての自覚を求めて国民国家の担い手となっていたことがあとづけられている。同書, 101~108頁。
- 46) Lange, S. 135ff., 139f.; Magnus Schwantje, *Hans Paasche. Sein Leben und Wirken*, Berlin 1921, S. 11f. (Nachdruck als Anhang in: "*Auf der Flucht*" erschossen...).
- 47) Lange, S. 152f.; Paasche, *Mein Lebenslauf*, S. 56f. (引用は後者から。)
- 48) Lange, S. 152f. 予備役士官パーシェが当初配置されたのは、ヴェーザー河口の灯台「ローター・ザント」であった。彼は、次いで、キールを基地とする機雷敷設艦「ペリカン」(2424トン, 乗組員200名弱)の副長となり、1915年7月からは、ヴィルヘルムスハーフェンの第2水雷団第7中隊長として新兵の教育にあたった。
- 49) *Ibid.*, S. 164f.; Heinz Kraschutzki, *Meine Wandlung: Fort vom Militarismus!*, in: "*Auf der Flucht*" erschossen..., S. 51; Wanderer, S. 36.
- 50) Lange, S. 168ff.
- 51) *Ibid.*, S. 201ff., 220ff.
- 52) Paasche, *Das verlorene Afrika*, S. 7.

- 53) Hans Paasche, *Die Forschungsreise des Afrikaners Lukanga Mukara ins innerste Deutschland*, hrsg. v. Franziskus Hähnel, Hamburg 1921, Neudruck mit einem Nachwort von Iring Fetscher, Bremen 1993. なお、永原陽子「「土地なき民」のゆくえ——ドイツ現代史の中の「西南アフリカ」——」『歴史学研究』581号（1988），27～39頁は、ドイツ領西南アフリカの蜂起とその鎮圧戦争に関わるハンス・グリムらの文学の考察を通して、この地の「体験」がヒトラー流の「血と土」の思想を受け容れる重要な土壌を形成したことを明らかにしている。パーシェのアフリカ体験も、こうしたドイツ帝国の植民地体験全体の脈絡の中で考察する必要があるだろう。

（明治大学文学部教授）

Hans Paasche: The African Experience of a German Imperial Navy Officer

MIYAKE Tatsuru

Hans Paasche was a German Imperial Navy officer who, as a result of his experiences in German East Africa, came to resist the system of the German Empire.

Hans Paasche, the son of Professor Hermann Paasche, a member of the National Liberal Party who became the Vice-president of the National Diet in 1912, was born in 1881. When he was in the eighth year of Gymnasium, he went into the Imperial Navy, becoming a lieutenant in 1902. In 1904 he was sent to German East Africa as the navigation officer of a light cruiser. His early adventures included shooting lions and crocodiles, and taking part in the Ngoma dance.

However, in July 1905 the Maji Maji rebellion against German rule began, and because Paasche was the only naval officer who could understand Swahili, he was immediately sent to the rebel area. He distinguished himself in the campaign, but at the same time he had some shocking experiences. He had to sentence the so-called ringleaders to death and attend their hanging; he was told by a dying African on the battlefield that they had been mistaken for the enemy. What shocked him most was that his fellow Germans were so eager to acquire crown-order that they were ready to provoke the Africans to resume the campaign.

After the rebellion Paasche married the daughter of a Jewish bank director. On their honeymoon journey to the source of the Nile, Paasche became more and more aware of the destructive influence of European civilization on native African life and was plagued by agonizing memories from the Maji Maji rebellion.

When Paasche returned to Germany he became a leading figure in the German abstinence and life reform movement (though not without some racial bias) and participated in the peace movement. His transformation was directly related to his experiences in German East Africa.